

「こよいのメイン料理は、『ナキウサギのロースト・山ぶどうソース』でございます」

黒いスーツをびしっと着こんだ執事が告げた。顔は白、体は黄金色のテンだ。

ここは、森の中のクロテン屋敷。食堂は新年のディナーの真つ最中だった。豪華な家具、高級じゅうたん。暖炉ではパチパチとマキが燃え、外の吹雪を忘れさせてくれる。新年用に飾りつけた長テーブルで、四人の紳士がこった料理に舌つづみを打っていた。

「うーん、いい香りですね……」

白い冬毛のオコジョは、皿の上に鼻をつきだして目をつぶる。茶色の毛のイタチが、舌なめずりしながらきいた。

「ナキウサギ、おれは初めてつす。ウサギとどちらがうん



ですかね？」

「ウサギより、少しだけしよっぱいですかね」

イタチに答えたのは、これまた白毛で小柄なイズナ。

「でも、涙の分だけ味に深みがあるのです」

イズナは、そそくさと小さなナイフとフォークを取り上げた。この屋敷はいつも、客の体に合った食器を用意してくれる。主人のクロテンは、もてなし上手で有名だった。銀の毛並みのクロテンがほほえみながら言った。

「さあみなさん、我が家のコックが腕をふるった料理を、心ゆくまでお楽しみください」

みな料理を口に運ぼうとしたときだ。リンゴーンと、玄関のかねがひびいた。

「こんな吹雪の夜ふけに、だれだろう？」

田部智子

絵 高垣真理